非言語情報に関する知識が表情解読の正確さに及ぼす影響

—解読スキルの自己評定の妥当性検討とともに—

○小川一美・松尾貴司

(愛知淑徳大学心理学部)

キーワード: 解読スキル, 知識, 表情解読

The influence of knowledge about nonverbal cues on accuracy of decoding facial expressions: Validity of self-rated decoding skill.

Kazumi OGAWA and Takashi MATSUO

(Faculty of Psychology, Aichi Shukutoku Univ.)

Key Words: Decoding skill, Knowledge, Decoding facial expressions

目 的

Rosip & Hall (2004) は、非言語的手がかりについての知識の量が読み取りスキルの個人差に影響を与えると考え、非言語の手がかりについての知識量を測定する Test of Nonverbal Cue Knowledge (TONCK) を開発した。相川 (2009) のソーシャルスキル生起過程モデル v.3 では、生起過程の中心に社会的スキーマが想定されており、社会的スキーマが相手の反応の解読、対人目標の決定など全ての過程と相互に影響を与え合っている。したがって、知識の体制化されたものが社会的スキーマであるとなると、知識量はソーシャルスキルとしての対人行動や認知過程に影響を及ぼすと考えられる。

相手に対する感情を適切に表出し、またそれを認知することは、円滑な対人関係を展開していく上で欠かすことができない (大坊・高橋・磯・橋本, 2001)。つまり、表情解読はソーシャルスキルとしての対人行動や認知過程の中でも、基本かつ重要な過程であると言える。そこで本研究では、この表情解読に焦点をあて、ノンバーバルコミュニケーションに関する知識量と自己評定による解読スキルの高さが表情解読の正確さにもたらす影響を検討する。

方 法

実験参加者 女子大学生 49 名。

表情解読実験 (1) 手続き: 強制選択法による実験と視覚的評価法 (Visual Analog Scale: VAS) による実験を行った。いずれの実験も、Apple 社の iPad を縦置きにした状態で、上半分に顔表情画像を呈示し、下半分にそれぞれの評定用ボタンを呈示した。強制選択法では、基本 6 表情である「喜び」「悲しみ」「怒り」「驚き」「恐怖」「嫌悪」と、「中立」の 7 種類から、呈示された顔表情画像に最もよく当てはまると思われるものを 1 つ選択させた。VAS では、顔表情画像に各表情がどれくらい表れていると思うかを、強制選択法と同じ 7 種類について、0~100 の範囲でボタンをスライドさせる方法で評定させた。(2) 顔表情画像: ATR 顔表情画像データベース DB99 に収録されている画像のうち、女性モデル 2 名 (F03 および F16) の正面顔データを用いた。Neutral, Happy (mouth open), Sad, Angry (mouth close), Surprised, Scared, Disgusted の 7 種類の表情について各 1 枚の画像を使用した。各評定方法において、人物 2 名×顔表情画像 7 種類×2 回をランダムに呈示し、合計 28 回の評定を行った。

調査用紙への回答 (1) ノンバーバルコミュニケーション

(NVC) に関する知識テスト: 日本語版 TONCK (TONCK49; 河野・篠田, 2008) から表情やパラ言語といったノンバーバルコミュニケーションに関する項目で、正答率が著しく低くなく正解の根拠が明確である 16 項目を選択し、文意をわかりやすくするため表現を一部修正し使用した。さらに、顔面筋動作の Action Unit (Ekman & Friesen, 1978) を参考に、基本 6 表情を記述する 6 項目も追加した。22 項目について、「各文章が一般的な人の行動として正しいと思うかどうかを教えてください」という教示のもと、○か×で回答させた。(2) ソー

シャルスキルの自己評定: 相川・藤田 (2005) による成人用ソーシャルスキル自己評定尺度を採用し、5 段階で評定させた。本研究では下位尺度である「解読」の 8 項目の合計点を分析に用いた。

結 果 と 考 察

NVC に関する知識量と解読スキルの自己評定と表情解読行動の相互関連性を検討するため、相関係数を算出した。知識量と解読スキル自己評定には有意な相関関係は示されなかった ($r=.087, ns$)。しかし、知識量と VAS による正答数には有意な正の相関関係が示され ($r=.353, p=.013$)、知識が多いほど表情画像が呈示された際にその表情が多く表れていると正しく解読することができていたと言える。一方、解読スキル自己評定と強制選択による正答数の間には負の相関傾向が示された ($r=-.243, p=.092$)。つまり、解読スキルの自己評定が高いほど強制選択による表情解読行動が正確でないという結果であった。なお、知識量と強制選択による正答数、解読スキル自己評定と VAS による正答数の間には有意な相関関係は見られなかった ($r=.168, r=.054$)。

次に、強制選択による正答数を基準変数、NVC に関する知識量と解読スキル自己評定を説明変数とした強制投入法による重回帰分析を行ったところ、重回帰式は有意にならなかった ($F(2, 46)=2.418, ns, R^2=.095$)。しかし、VAS による正答数を基準変数にしたところ、重回帰式が有意となり ($F(2, 46)=3.298, p=.046, R^2=.125$)、NVC に関する知識量から VAS に対する標準偏回帰係数が有意となった一方で ($\beta=.351, p=.015$)、解読スキル自己評定から VAS に対する標準偏回帰係数は有意にはならなかった ($\beta=.023, ns$)。

以上の結果より、表情解読行動に影響を及ぼすのは、解読スキルの自己評定より NVC に関する知識量であることが明らかとなった。ソーシャルスキルの自己評定は他の手法に比べ測定が簡便であるという利点のため、非常に多く用いられている。しかしこれまでも、自己評定で測定しているものが対象者のソーシャルスキルを正しく捉えているとは言えないのではないかとといった疑問が多くあげられてきた。相川 (2009) も、ソーシャルスキルという概念の特性から考えても、個人のソーシャルスキルの程度を自己評定尺度だけで判断するのは危険であると指摘している。本研究の結果からも、自己評定という手法をスキルの実態測定として使用することの妥当性の問題が示されたと言える。

引用文献

相川充 (2009). 新版 人づきあいの技術—ソーシャルスキルの心理学—サイエンス社 / 河野義章・篠田直明 (2008). 日本語版 TONCK の開発 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 59, 145-154. / Rosip, J. C. & Hall, J. A. (2004). Knowledge of nonverbal cues, gender, and nonverbal decoding accuracy. *Journal of Nonverbal Communication*, 28, 267-286. 他

註: 本研究は JSPS 科研費 24730522 および、平成 25・26 年度愛知淑徳大学共同研究助成を受けて行われた。